

唾の皇子 建皇子

(651年～658年)

飛鳥時代、651年に中大兄皇子（天智天皇）と蘇我の遠智娘の間に建皇子（たけるのみこ）という人がお生まれになられた。建皇子は唾であった。本当の意味で、第一号の唾の皇子であろう。

日本書記（巻第27）天智天皇編に次のように述べている。

「其三日_レ建皇子_一。唾不_レ能_レ語」

其の三（みたり）を建皇子（たけるのみこ）と日す。唾（おふし）にして語（まことと）ふを能（あた）はず。

現代語に訳すると『第三子を建皇子といい、唾でお話しできなかった。』という意味である。

さて、建皇子はどんな人か。探ってみよう。

日本古代人名辞典によると、建皇子は齋明天皇の皇孫で中大兄皇子（天智）の皇子で母は蘇我山田石川麻呂大臣の女遠智娘であるという。建皇子が唾になった理由は明らかになっていないが、吉野裕子薯の持統天皇（人文書院）には遠智娘は建皇子が651年に誕生しているの、父の横死の衝撃から立ち直れぬまま、精神錯乱のうちに懐妊し、皇子を生産して間もなく、逝ったとも推測されていることから、皇子の唾は母の精神状態がもとなのではないかと述べている。

建皇子は大化の改新で有名になった中大兄皇子（天智天皇）の御子であったということは驚きである。しかし、母の遠智娘が亡くなったため、祖母の皇極上皇（齋明天皇）に幼い姉妹ともに引き取られ、そのまま育てられて八歳で世を去ったのである。死の原因は記録されていない。ということは、私の推測であるが、唾であった為にコミュニケーション障害がもって、精神的疲労から病気が起きてしまい、亡くなったのではと考えられる。

天智天皇の御子で男の子が初めて生れたのは建皇子で、もし、体に障害がなかったら、天皇になっていただろう。

皇極女帝がこの皇子を大変、可愛がっていたのである。「齋明記」4年5月編に次のように書かれてある。

「今城（いまき）なる小群（をむれ）が上に曇だにも薯（しる）くし立たば何か歎かむ射ゆ鹿（しし）を認（つな）ぐ河辺の若草の若くありきと我が思（も）はなくに飛鳥川 みなぎらひつつ行く水の間（あひだ）もなくも思ほゆるかもと歌ひたまひき、天皇、時時に唱ひたまひて悲（み）ねしたまひき。」

和訳してみると次のようになる。

今城（奈良県吉野郡大淀町）の樹立の上に、せめて雲だけでもはっきり立ってくれば、賓宮をそこと知ることが出来、心も慰められるが、その雲も立たない。建王は賢くて大人のようにだった。わかったとは思われない。豊かに流れてゆく飛鳥川の水のように、隙もなく、たえず建王のことが思い出される。

参照（持統天皇・吉野裕子著）

また、齋明4年、10月に天皇（齋明）が紀伊の湯（十紀温湯）に幸した時も憶い悲泣し、次のように歌を詠んでいたという。

「山越えて海渡るとも、今城のうちは忘らゆましじ」

（『紀』参照）

-和訳-

「私は何処へ行こうとも、今城の墓に眠る建皇子は忘れない」

そして、この歌を秦大蔵造万里に詔して、世に伝え忘れしめぬよう命じたのである。

建皇子と皇極上皇（齋明天皇）とのコミュニケーションはどのようにしたのであろうか。又、その皇子は何を求め、何を見つめていたのだろうか。

ちなみに建皇子の末っ子の妹は持統天皇である。

齋明天皇

594年～661年 第37代。飛鳥時代の女帝。在位655～661年。642年に即位し皇極天皇となり大化の改新で讓位。孝徳天皇の死で重祚し、齋明天皇となり、百濟救援のため西下し、筑紫（九州）で崩じた。天智・天武天皇の母。

参照

日本書記（巻第27）天智天皇編 （岩波書店）

（校注者・坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋）

日本古代人名辞典

吉野裕子著「持統天皇」（人文書院）

「齋明記」4年5月編

日本史辞典（昇龍堂出版）谷口五郎、島田次郎編

文責 那須 英彰